1989年10月19日第三種郵便物認可　1995年11月1日発行（毎月1回1日発行）No. 85

あんちアパルトヘイトニュースレター

新生南アと日本の草の根メディア

1995年11月 第85号

もくじ

廃刊号に寄せて

田村敦子　2
大西佐奈枝　2
くぼたのぞみ　3
田中啓正　4
吉橋聡　4
倉林由男　5
松本晶　5
松本仁一　6
山口三夫　9
金山麻美　10
根本利道　12
補原彰　16
高林敏之　18
森川純　22
牛嶋保夫　25

＊渋谷さんへ　田村幸子　31

発行　あんちアパルトヘイトニュースレター編集部

田村敦子

須関さんへ

お疲れ様でした。お一人にまかせっきりで『ニュースレター』が終わってしまうのが寂しい…と言うのは勝手なことだと思います。でも、毎号記念切手が律儀にはってある茶封筒がもうこないかと思うと一抹の寂しさは隠せません。

何かと動向を見守ってきた南アは一見静かな国になりました。英雄マンデラも世界各国に行っては金策に腐心する政治家になってしまいました。多くの不平不満がマグマのように南ア国内に蓄いていることでしょう。

その辺は日本も同じです。もっとさめきっているかもしれません。自分のことしか考えない人が当たり前にいて、傍若無人な人間を叱る人も少なくなってきました。中途半端な個人主義があふれ、外見ばっかり「アメリカ仕込み」です。うわっつらばかり。

失礼を承知で言わせてもらうと、そんな生活の中で、アパルトヘイト撤廃前の南アのブレイク寸前の熱気に日本の人たちは励まされていた気がします。恥かしいけど言っちゃえば「人間の尊厳」とか「怒り」に触れたこと。日本人が、と一っても鈍感なものです。目を転じれば日本国内にも、いえ家庭にもうずまいているのに変ですよね。南アから教えてもらったことを忘れないようにしたいと思います。

南アに興味を持った時、私はなんと１９歳、生意気なガキで自分の知ってる知識を背伸びして振り回していましたよ。その私ももう２０代後半。会社社会に染まりつつありますが、おかしいことには「何？」と怒っていきたいと思います。

須関さん、本当にありがとうございました。そして、これからも、宜しくおつき合いお願いしますね。　（十月八日）

大西佐奈枝

最終号に寄せて

昨年度で、ＳＡＦＥsectionとしての活動を打ち切った私たちは今、それぞれの道でいろいろなことを考え、悩みながらも日々歩んでいるところです。

ＳＡＦＥsectionとして月２回開いていた勉強会の中で私たちが学びとったことは、今でも一人一人の胸の中で大きく響いています。南アフリカのことだけではなく、日本のこと、自分自身のこと、そして自分と世界の関わりのことなどです。

私自身が、勉強会の中から学んだいちばん大きなことは、「『豊か』な生活は、誰かの『犠牲』の上に成り立っている」という事実でした。このことがどんな意味を持っているのか、私は今も考え続けています。例えば、自分の今置かれている状況というのは一体何なのか、自分がこの国で生活しているというのは即ちどういうことなのか、自分は「世界」とどう関わっていけばいいんだろうか、自分の中で向き合っていかなくてはならない問題はたくさんあります。

これらの問題は、つきつめていくと結局は『自分の生活』に行き着くのではないだろうか…、最近そう思い始めました。「生活」とは、自分の生き方や暮らしそのものを反映している言葉だと思います。「生活を考える」ことは、自分と環境、自分と自然、自分と地球、そんな関係を考えていくことになるでしょう。もうちょっと言えば、それは「人間とは何か」という問題にもつながってくると思います。

いつも悩み続ける人間でありたい。私も今、自分がこれからどういう生活を送っていくのか、そのことで頭がいっぱいです。

最後になりましたが、毎月毎月、貴重な南アフリカの情報を私たちに届けて下さった編集部のみなさん、本当にありがとうございました。

くぼたのぞみ

So Far From Africa, So Close to What?

ーどんどん遠くなるアフリカー

1990年2月にネルソン・マンデラが解放されてから早くも5年の歳月が経とうとしている。手元にあるバックナンバーをひっくり返して見ると、私がニュースレターに参加し始めたのは1988年7月号(第3号)からだ。笹生博夫さんが南アの週刊紙ウィークリーメイルやニューネイションから記事を選んで、それを私が翻訳し、笹生さんがチェックして、私が入力、プリントアウトするというパターンで始まった。

1990年2月からは私もウィークリーメイルを購読しはじめたので、記事の選択も自分でやるようになった。それがどのくらい続いただろうか。途中から、今度は私が記事を選んで、弘中敦子さんが訳し、やんわりと、しかし執拗に、連絡を怠らない須関さんを経由してファクスが届き、それを怠け者の私がチェックして、かろうじて締切までに送り返す、そんなサイクルで断続的にしばらく続いた。そして今年の春ころ、私が目の不調のためにとうとうギブアップ。今も新聞はまだ届いている。でも、この半年ほどの分は未開封のまま、こうしている間も私の脇にうずたかく積み上げられたままだ。ああ、どうしよう、これ……。

1988年8月早稲田奉仕園の「アジア・オセアニア・ワークショップ」から始まって、89年1月にハラレの会議に出席したり、8月に「南ア女性キャンペーン」で走りまわったりしたころが、私が反アパルトヘイト運動に最も時間と労力を費やすことができた時期だった。その後、ニュースレターの編集長が高柳美奈子さんから須関知昭に変り、関わり始めたころ小学生だった3人の子どもたちもいまでは中学生と高校生になって、見上げるように大きくなり、その分大きな悩みも抱えるようになった。ネルソン・マンデラはいま南アフリカの大統領だ。

こうして振り返ってみると、人と人が出会い、行き違い、遠ざかり、また出会い、と実にさまざまなことが起きたなあと思う。個人的には楽しかったとか、苦しかったとか、ひとまとめにしてしまえない、実り多い時期ではあった。

一冊の本の翻訳からアフリカに近づいた私だったけれど、そしてこの間、何冊か世に送り出すことができたけれど、その間に流れた時間について、なかなかうまく言葉にできない。ベッシー・ヘッドの短編集『優しさと力の物語』がもうすぐ出ることになっているけれど、まだ前途多難だ。

そうこうするうちに、なんだかぐんぐん遠くなっていくアフリカ。

それにしても、長い間、孤軍奮闘の編集長、須関さん、ごくろうさまでした。

(1995.12.9)

田中啓正

僕にとっての「アフリカ行動委員会」

１９８２年のある日、「南ア領事館へ抗議に行かないか？」

それが、僕がアフリカ行動委員会へかかわった一歩でした。南アのこと、アパルトヘイトのこと、ほとんど何も知らないくせに、人とのかかわりのうちに参加するようになりました。

いろんな人と知り合いました。世の中の関心が一番高かった頃、恵比寿の事務所には、入りきれない数の人たちが集いました。“去る者は追わず、来る者は拒まず”という色合いの行動委員会で実に多くの人を知りました。そして多くの人が去りました。

後年、解散するか、しないかという議論を何度も経て、“やろう”という人間がいればやり続けようという状況が続きました。その中に僕が居ました。しかし「何をやるのか？」みつけられないうちに事務所を閉じました。様々な人がかかわったプロジェクトに対する通信が多く来ました。しかし、それにほとんど応えられない自分が居ました。なんで続けているのだろう？　何がしたいのか？……。自問自答の日々が続きました。最後は「ニュースレターが続く限り看板を降ろさない」という半ば他人まかせ的な根拠しかありませんでした。そのニュースレターも閉じることになりました……。

何ができるのか、何をしたいのか、これからも自問自答が続くでしょう。今、思い起こせることは、南アのどなたかが言ってらしたこと、「あなた方の世界で闘うことが我々と連帯していくことなんだ」という言葉が僕の自問となっているということです。僕の立っている世界（場）で僕を出していくことが、この行動委から学べたことだと思っています。

今まで様々な力を貸して下さいました多くの方々、どうもありがとうございました。また、どこかで。

古橋　稔

とうとう『あんちアパルトヘイトニュースレター』も終わってしまう。南アフリカも新しく生まれ変わり、大いなる矛盾・困難に直面し、そこから何か新しい制度が生み出されるかもしれない。それなのに日本と南アフリカを結びつけていた一つが終わってしまう。残念に思う。

アフリカ行動委員会も市民運動ならば、自衛隊のルワンダＰＫＯに対して何も対処できなかったのは問題であったと最近反省している。一つの転機にならざるをえないと思っている。

倉林由男　日本テレビ

ミュージカルの『サラフィナ』をNYで見て、その圧倒的な音楽の力と現実の姿に驚き、そのまま走り出して、マンデラ来日時には日大講堂で司会までやってしまいました。

ラジオのアナウンサーだった私も、今はテレビの記者。南アの変遷も、大統領就任も横目で見て、現在はオウム裁判の取材を責任持ってやってます。

楠原先生はじめ、皆さんのこれまでの努力に最大の敬意を払います。ご苦労さまでした。でも、アパルトヘイトの本質が本当になくなるのはいつなのでしょう？

サラフィナと仲間たちがソウェトの高校で闘った、差別と貧困の克服が本当に達成できる日まで、私もどこかで見守っていたいと思います。

松本　晶

約四年間の購読、とても楽しませて頂き、ありがとうございました。

思えば大学一年の時本誌を紹介され、まがりなりにも自分の望む仕事につくことができた今現在に至るまで、日本国内はもとより世界は大きく変わりました。そうした中でも、やはり南アフリカは私にとって一番注目してきた国であり、今後もいっそう思いをはせるべき土地となることでしょう。

私のこれからの人生の中で、出会い、そして思い出となっていく種々な事物とともに、同じ時代に生きる数多くの地球人に心からのメッセージを送れる人間になっていけたらと、強く強く思います。

松本仁一 朝日新聞編集委員

権力闘争と「反権力」闘争

権力闘争と反権力闘争は、どこがどう違うのだろうか。

簡単な話です。「あいつを権力の座から引きずり落として、オレが座るんだ」というのが権力闘争。自民党の派閥争い、新進党と自民党の蹴り合い、米国の民主党と共和党の対立。みんなそれです。

一方、反権力闘争は、「権力とはつねに闘っていく」という運動です。その裏には、権力というのは基本的には悪いことをする存在であるという仮定があります。したがって自分が権力の座にすわるつもりはなく、権力闘争の外にいて、既成の権力を批判するスタンスを失わない。たとえば全共闘、ベ平連などがそうでした。

それでは質問です。次のグループのうち、反権力闘争の組織はどれでしょうか。

パレスチナ解放機構（ＰＬＯ）
南ベトナム解放民族戦線
アルジェリア解放戦線
アフリカ民族会議（ＡＮＣ）

答え。一つもありません。

ＰＬＯは、「支配権力をイスラエルからもぎ取り、自分たちがパレスチナを支配する」ことを目的とした組織です。南ベトナム解放民族戦線は「南ベトナム政府＝米国」から、アルジェリアの場合は仏植民地勢力から、支配権力を奪い取ることが目的でした。

ＡＮＣにしても同様です。「白人支配を崩壊させる」だけが目標だったわけではなく、「その後で自分が権力を握る」ことが目的だった。まごうべくもない「権力闘争」だったのです。

では、部外者である私たちの反アパルトヘイト運動は何だったのか。

これは「反権力闘争」だったことに間違いありません。私たちが南アの権力を握れるわけはないのですから。

①黒人大衆を虐げる白人支配権力は間違っており、黒人解放を実現させるべきだ。

②ＡＮＣは黒人の解放に向けて闘っており、解放運動の主体としての正統性を持っている。

③それは明らかに権力闘争であるが、方向としては私たちの期待と一致している。

④したがって当面、ＡＮＣの闘いを支援する。

――私たちの運動は、そういう論理に基づいていたのではないでしょうか。つまり、視点はつねに「黒人大衆の解放」にあるわけで、ＡＮＣはその補助的な役割を果たしていたにすぎません。ＡＮＣは、いわば脇役なのです。

しかし、長い運動の過程で、ともすればその認識が甘くなりがちでした、運動の目標が「ＡＮＣこそすべて」に短絡してしまったケースが多々あったのではないでしょうか。

そうした思い違いは、日本の反権力運動を混乱させる原因となってきました。たとえばベトナムの場合、「南ベトナム大衆の解放」が主役であるにもかかわらず、脇役の解放戦線を主役と思い違えてしまった。その結果、人々は新しいベトナム権力の腐敗や人権抑圧の事実に目をつぶろうとし、それが隠しようのない事実だと分かると、挫折し、運動からつぎつぎに手を引いてしまうのです。

アルジェリアについて、「元活動家」たちから私の記事を非難されたことがあります。「アルジェの戦いを英雄的に戦い抜いた彼らが腐敗するはずがない。解放戦線政府の腐敗がイスラム原理主義の台頭を招いたというお前の記事は違っている」というものです。

しかし、権力が欲しくて闘ってきた勢力が、手に入れた権力にしがみつこうとするのは当然ではないでしょうか。権力を他者に渡したくないから、批判を封じ込めようとする。やがて新しい権力による人権抑圧が始まる。そこで腐敗が生まれます。

権力は腐敗する。絶対権力は絶対に腐敗する。これは真理です。ＰＬＯのアラファト議長の人権抑圧と腐敗は、残念ながら事実です。彼は、自分の権力維持の方を、パレスチナ大衆の幸福より優先させてしまったのです。そうしたことが起きたときひどい目にあうのは、私たちの主役であるべき大衆なのです。ＡＮＣとて、それから逃れられるものではありません。

私たちの運動が「反権力闘争」であるなら、私たちの視点はつねに大衆とともになければいけない。新しい権力が大衆を虐げているなら、今度はそれをきちんと監視し、批判していかなければいけない。そのスタンスを忘れてはいけないのです。

１９８５年当時、ウィニー・マンデラの、大衆を忘れた傲慢ぶりを記事にしたことがありました。ところが、一部の読者から「朝日はアパルトヘイトを助けている」と非難されました。ＡＮＣについても、ベトナムやアルジェリアと同じ「取り違え現象」を起こしている人たちがいるな、と感じたものです。

やがてネルソン・マンデラが釈放され、来日しました。そのときマンデラは、反アパルトヘイト運動を続けてきた市民組織より先に、経団連に挨拶に行ってしまいました。それに腹を立て、反アパルトヘイト運動から離れてしまった人がいると聞きました。やはり、取り違え現象だと思います。

権力を握るものにとって、経済基盤を確立するのは大切なことです。権力闘争の勝利を確定したマンデラがそうした行動を取ったことは、むしろ当然だと思います。ちょっと正

直すぎる感はありますが、それは取り巻きが悪かったのでしょう。むしろマンデラに私たちが期待しなければいけないのは、挨拶の順番ではなく、早く経済基盤を確立し、公正な政治を行って、苦しむ大衆を救済してほしい、ということであるべきです。

ＡＮＣ幹部の中には、権力の座につくや早くも腐敗し始めたものがいます。大衆の敵です。黒人大衆の解放を目指して反アパルトヘイト運動に関わってきたなら、こうしたＡＮＣ権力の腐敗に対しても、継続的に厳しい監視と批判を続けていかなければならないはずです。「白人権力の黒人抑圧は許せないが、黒人権力の場合は仕方がない」と考えているとしたら、それこそまさに人種差別ではないでしょうか。

権力闘争の場合は「これで目的達成」というゴールがあります。しかし、反権力闘争にゴールはありません。権力が存在するかぎり、永遠に続く闘いなのです。しんどいけれど、粘っこく続けていかなければならないものです。そこら辺、間違えてはいけないと思います。しかし、現実はそうはいかない。

ＡＮＣが合法化されたのは１９９０年。アパルトヘイト廃止が９１年。「取り違え現象」的な意味での運動目標は、次々に消えてしまいました。「取り違え派」は目標を失い、南アの大衆の状況になど目もくれなくなりました。

そんなやりにくいご時世の中で、『あんちアパルトヘイトニュースレター』はよくがんばったと思います。そして、編集にたずさわった須関知昭さん、ごくろうさまでした。

９５年５月、元朝日ジャーナル編集長の伊藤正孝さんが亡くなりました。２５年も前に、日本にアパルトヘイトの実情を初めて詳しく報告したジャーナリストであり、「反権力」「大衆の視点」という腰がまえを決して忘れない人でした。伊藤さんの死とニュースレターの廃刊。なにか時代的なものを感じます。

しかし「反権力」のわれわれとしては、休むわけにはいきません。まあ、一息入れて、またシコシコと始めましょうよ。

山口三夫

一つの感謝

いよいよ終刊だときく。一つの時代が終わろうとしているのだろう。先ずは『ニュースレター』を支えつづけてくれたヴォランティアの人たちに、個人的な感謝を捧げたい。

五年まえ不慮の腰椎骨折に遭っていらいとりわけそうだが、スタミナ欠如ゆえに行動力が萎えて集まりにも出られなくなったぼくは、ほとんどもっぱら『ニュースレター』にのみ情報源を求めてきたといえるからである。とりわけ「草の根」の動きについては。

淡路・阪神大震災につづいて地下鉄サリン事件で始まった今年は、戦後五十年であっただけに、この半世紀における日本の歩みの大きな歪みそのものを浮彫りにすることにもなった。奇妙きてれつな連立政権に《謝罪決議》はもとより《不戦決議》ができようはずもなく、国際的に醜態をさらすにとどまったことにぼくはけっして驚かない。

南部アフリカで「名誉白人」ではなくなったとしても、独善的な日本人の実体じたいが変わったわけでないことも、少なくともわれわれ仲間には明々白々であろう。南ア人民の脱アパルトヘイトの建設が一朝一夕で成るべくもない、多年を要する難事業であることも心得ている。そして、かれらが建設的努力を放棄しないであろうことも。

この弓なり汚染列島にこだわりすぎたと見えるだろうぼくは、この“こだわり”を墓場まで持っていくしかないが、いたずらに絶望に陥るまいと踏んばっている。《敗戦》からもほとんど何ひとつ学ばなかったこの国では、大学においては文部省主導の「教養部」解体が着々と進み、冷戦構造の崩壊にも関連して例えば「日本アジア・アフリカ作家会議」は解散を議事日程にのせた。一つの時代の終焉を想わざるをえない所以である。

しかし、バブル経済が崩壊し金融機関の犯罪的破廉恥が露顕しても、行政機構すべてにわたる官僚政治の貫徹、等々はまだ終わらない。政治・外交の貧困その他、数ある不易の現象から《人権後進国》だけを、これにつけ加えておくとしようか。

だが、ぼくたちは断じて初心を忘れないだろう。状況は、四半世紀まえよりはるかに意図的に《あいまい》であり、それゆえ目に見えぬ困難さを増してはいるが、新たな「かたち」を探りつづけるばかりである。また半世紀（ぼくは消えるが）、南ア人民の建設の闘いに熱いまなざしを注ぎつづければ、新たに見えてくるものがきっとあるだろう。

火が消えたのではない。個人的な感謝を超えて、連綿と未来の諸世代に松明を渡し継ごう。

金山麻美

タンザニアから

タンザニアに住んで、もう六年がすぎました。この間、何をしていたかといえば子供を二人、当地で出産し、タンザニアの人に助けてもらいながら育てているといったことだけで特に何もしていません。

私はここに住んでいる人たちと同じ目線で物を見、語り合いたいというのが長年の夢なのですが、もともと友達を作るのが下手ということもありますが、そのほかにも経済的なことなどいろんな要素がからまって悲しいかな、心からのタンザニア人の友人を得るのはなかなか難しいことでした。でも最近、ちょっとうれしいことがありました。

１０月から１１月末にかけて２週間ほどキリマンジャロ山麓のルカニ村というところに行ってきました。知人のタンザニア人、アレックスのふるさとで、彼ら一家が帰省時に使う家があいているので、そこに泊めてもらいました。

タンザニアの一番暑い時期でも、朝晩、長袖の上着が必要なほど涼しく、３、４軒が共同で使う水道からはキリマンジャロの湧き水が出てくるといったとてもよいところです。私と子供たち（夫は仕事の都合で来られず）の行ったときはちょうど年に一度のコーヒー収穫のシーズンで山の斜面の畑には背の高いバナナの木に守られるようにして赤い実を付けたコーヒーの木が一面に並んでいました。

実は去年もここに来たのですが、アレックス一家と一緒だったうえに下の子知世の人見知りの激しい時期だったこともあって彼らに頼り切ってしまい、洗濯とちょっと料理を手伝うくらいであとはボーッとすごしていたんでありました。けれども今回はアレックスの家には留守番役を仰せ付かっているアレックスの甥っ子（２２才）とお父さん（８２才）が寝泊まりしているだけで、二人は畑仕事で忙しいので、私が水汲み（１０m先の共同水道から汲んでくるだけだけど）、炊事（炭火のコンロを使って。ほかのママたちは近所から取ってきた木を乾かして薪にしてる。火起こしがけっこうたいへん）、洗濯（もちろん手洗い。固形せっけんで）、掃除（コンクリートの床の場合、雑巾がけ。雨が降るとドロドロになりたいへん。土の床の場合、ほうきがけ）、買い物（私は歩いて１０分の雑貨屋と肉屋しか行かなかったが、バラエティに富んだ野菜を食べたかったら遠くの市場まで行かないとだめ）、畑仕事のお手伝い（コーヒー摘みとか。ほんのちょっとだけだけど）と目いっぱい（でもないか。水汲みと掃除に関しては大分甥っ子に手伝ってもらいましたし、隣に住んでるアレックスのママにもいろいろと助けていただきましたし）やったので、たるみ気味だったお腹も２週間で見事にシェイプアップされ、足にはフンザ（やわらかい皮膚から虫が入り込んで卵を産む。こわいよ～。でももう治ったから大丈夫）うおの目までこさえてしまいました。少しは田舎のママたちのたいへんさがわかったのでは…と思っています。

５才の篤史と２才の知世が村の子供たちといっしょになって、おもちゃなんかほとんどなくても一日中ころげまわって遊んでられたのは、こりゃ私たちにとって財産だなと思いました。差別しない子に育てたいというのが私と夫の一番の願いですから。

その分、洗濯がたいへんでしたけど。赤土で服も体もド～ロドロ。子供って本来はめちゃ汚いもんなんだという認識を新たにしました。もっとも村の子供たちは2、３日はおんなじものを着ていますが、（合理的だと思った）それでも他のママたちも天気のいい日はほとんど毎日洗濯していたようです。水場で洗濯をしながら近所のママたちと子供たちのことや、コーヒーのこと、選挙のこと（１０月２９日がタンザニアで初めての複数政党による総選挙でした）などをおしゃべりするのが、私にとってはとってもうれしく楽しい時間でした。

アレックスのママが摘みたてのキリマンジャロコーヒーを煎ってくださいました。細かくくだいたそれを沸騰したお湯に入れ、茶漉しを使ってマグカップにそそぐ。もともとそんなにコーヒー好きでない私でもうっとりするような香りと体に染みわたるような深い味わい。それはコーヒー収穫の苦労と楽しみを（ほんの一部分ではあっても）目のあたりにしたからでしょうか。そんな贅沢なコーヒーを楽しみながらあせらず、気負わず、ここの土地でここの人たちにお世話になりながら、自分のできることを少しずつやっていこうと思いました。

lilanga

Mganga mkuu anamnywesha damu ya ndege.
Akimaliza atakuwa mganga kamili.

Tanzania

村の大医者が鳥の血を弟子に飲ませている。
飲み終わった弟子は一人前の医者となる。

根本利通

民衆と国家
－１９９５年タンザニア総選挙から－

１１月２２日、タンザニアの総選挙の結果が出た。大統領、国会議員、ザンジバル大統領、ザンジバル議会の４つの選挙全てが政権与党であり、過去１８年、その前身を含めれば３０年以上にわたってタンザニアを一党独裁してきたＣＣＭ（革命党）の勝利に終わった。この間、世界最貧国の下から２番目に落ち込み、「変化」を熱望していたかに見えた民衆の選択の結果である。独立３０年余のアフリカの一国にとって「民主化」とき何だったのだろうか。

タンザニアは本土（タンガニーカ）と島嶼部（ザンジバル）かに成る連合国家である。タンガニーカは１９６１年に、ザンジバルは６３年にそれぞれイギリスから独立した。ザンジバルで６４年１月に起こった革命を期に、同年合邦してタンザニア連合共和国が誕生する。中央政府以外にザンジバル自治政府があり、国防、通貨、外交以外は大幅な自治権を持っている。

タンザニアがアフリカの中で名をなしているのは、「独立の父」ニエレレ初代大統領が６７年アルーシャ宣言でうちだし、行われた「ウジャマー」と呼ばれるアフリカ社会主義の建設であろう。自助・相互扶助の精神に基づく共同体主義は、タンザン鉄道の建設等の成功例もあり、一時第三世界の旗頭としてのタンザニアの地位を高め、南部アフリカ解放のリーダーとして活躍した。しかし国際交易条件の悪化や７８年に始まるウガンダとの戦争によって、その精神主義的な社会主義の経済は８０年代に入って破綻してしまう。

ムウィニが８５年ニエレレの後継者として第二代大統領に就任したときは、彼がザンジバル大統領として本土に先駆けて実施した経済の自由化が、軌道修正を迫られていたタンザニアに期待をもたれていたことは間違いない。そして、彼の飾らない誠実な人柄も好感をもって迎えられた。

８５～９５年のムウィニ政権の評価はどうであろうか。私は経済のことは良く分からないし、ただこの１０年間住んできた実感で物を言うしかないのだが、ムウィニが誠実な人だと言う人は今や誰もいない。ムウィニ政権になって世銀・ＩＭＦの指導下による経済の自由化が着実に進んだ。タンザニアの社会主義体制の根幹であった国営企業・公社の解体、民営化が進み、銀行を含めた外国資本の投資が奨励され、農村でも協同組合の瓦解、土地保有権の売買が行われている。その一方で最貧国として日本を含めた援助（ＯＤＡ）が大量に流れ込み、援助漬けになってきている。

かつて「ウジャマー」で、貧しくともプライドのあったタンザニア人の面影は殆ど消えたかに見える。ムウィニ政権の閣僚たちは皆肥え太り、いろいろな役所で小役人が賄賂を要求し、非能率でなかなか進まない。７５年に初めてタンザニアを訪れた私は、能率的とは言えなかったものの、他のアフリカ諸国と比べはるかに清潔だった記憶があるだけに、この変容には落胆していた。

今回の総選挙の一方の主役となったムレマは、９０年第２次ムウィニ内閣で内相にな

り、警察を握って汚職・腐敗摘発キャンペーンで名を上げ、９２年からは副首相に昇格していた。国民特に貧しい一般民衆にかなりの人気があり、何か困ったらムレマに駆け込もうという風潮が一時出来上がった。しかし当然それは他の大臣からすれば、自己の縄張り、権益を侵されるわけで、閣内でのムレマの孤立は公然の事実であった。そして昨年１２月の内閣改造で副首相を解かれ、労相に降格させられていた。

９５年2月になり、インド人実業家を巡る大スキャンダルが発生した時、ムレマはその発言から労相を罷免されることになった。その後は急展開で、魅力あるリーダーに欠ける野党による争奪戦の結果、ムレマはＣＣＭ離党、ＮＣＣＲ（建設と改革のための国民会議）の議長兼大統領候補となり、一躍政治の焦点になってしまった。３月はムレマの行く所大集会になって、若者・女性が踊り回り、大変な盛り上がりを見せた。ムレマの主張の眼目は「汚職の摘発」であり、ムウィニはじめ腐敗大臣の裁判を公言し人気を博した。

ＣＣＭ側の大統領候補はトップランナーと目されていたマリチェラ前首相が、昨年１１月のニエレレの批判で降格されてから混沌としていた。新旧入り交じった１５名の立候補者の中から中央委員会で３名に絞られ、更に全国執行委員会で下馬評の低かったムカパ高等教育相が当選した。この間はっきりしたのは、「国父」ニエレレのキングメーカーとしての役割である。公的には何ら資格がないにもかかわらず、２つの委員会に乗り込み、他の有力候補を下ろし、自分の推薦するムカパの多数派工作をしたと広く信じられている。ムカパは遅れている南部の出身であること、ジャーナリストから外交官を経て、情報相、外相等比較的利権の少ない官庁の大臣を歴任、清潔であること、有能な官僚としての評判がニエレレのお気に召したと言われる。

８～９月に行われた選挙人登録でも地域にばらつきはあったものの、約８１％の登録率になった。ただ有力な野党－ＮＣＣＲ，ＣＨＡＤＥＭＡ（民主開発党），ＣＵＦ（市民統一戦線）の統一大統領候補としてムレマ、そしてザンジバル大統領候補としてＣＵＦのハマドがほぼ決まっていたのが、ＮＣＣＲが副大統領候補として亡命中であったニエレレの政敵バブーを指名したことにより亀裂が入り、ＣＵＦは独自候補リブンバを擁立し、当初から独自路線を鮮明にしていたＵＤＦ（統一民主党）のチェヨも加えて野党側の大統領候補者は３名となり、国会議員選挙でもささやかれていた選挙共闘はお流れになった。

今回の選挙の焦点は、大統領選挙と共に、ザンジバル政府の選挙であった。ザンジバルはその歴史からアラブ系地主によるアフリカ人奴隷支配、複数政党制による人種対立を絡めた熾烈な選挙、暴力による革命とそれに続くアラブ系の人々の虐殺、海外亡命という複雑な背景を持っている。ここで詳述するのは避けるが、ザンジバルではＣＣＭに対しハマドという切り札を持つＣＵＦが厳しく対決し、もし自由で公正な選挙が行われればＣＵＦが勝つだろうと信じられていた。

１０月２２日、総選挙の１週間前にザンジバル大統領と議員選挙が行われた。４日間という長い開票期間、その間にＣＵＦの勝利がテレビ・新聞で報道されたが、ザンジバル選管の公式発表では、大統領選挙ではＣＣＭ候補の現職が５０．２％の得票率でハマドを破ったとされ、議会もＣＣＭ２６、ＣＵＦ２４の結果とされた。

さてザンジバル選挙の不正が表面化する中で、ＣＵＦが総選挙ボイコットの姿勢を見せたが、結局１０月２９日予定通り１３党が参加して、総選挙が行われた。しかしダルエスサラームを始めとして、各地で大きな混乱が起こった。投票箱・用紙の不足、選挙立会人の不在で投票できない人が続出した。ダルエスサラームではＣＣＭのポスターを貼った車

が、投票用紙と２７０万シリングの新札を運んでいるのを見つけられ、袋叩きにあった。各地で不正が行われた状況証拠はいくらでもあるが、ダルエスサラームでは翌日に投票を延長しても収まらず、３週間後に再選挙になった。しかしこの間各地の開票は進み、ＣＣＭの圧勝がはっきりしてきた。野党は選挙無効、それが駄目なら大統領選挙の開票結果発表停止を求めたが、裁判所に却下され、ダルエスサラームの再選挙をボイコットする姿勢を示したが、足並みが乱れ１１月１９日の再選挙に突入した。

総選挙の最終結果は次の通りである。

☆大統領選挙	当選	4,026,422	ムカパ	(CCM)
		1,808,616	ムレマ	(NCCR)
		418,973	リブンバ	(CUF)
		258,734	チェヨ	(UDF)
		333,936	無効票	

☆国会議員選挙　ＣＣＭ　１８６、　ＣＵＦ　２４、　ＮＣＣＲ１６、
ＣＨＡＤＥＭＡ　３、ＵＤＰ　３　　計　２３２
女性代表（比例制）３７、ザンジバル議会代表５　総計　２７４

ＮＣＣＲはムレマの出身のキリマンジェロの他、マラ、アルーシャで健闘、ＣＵＦはザンジバル、ＵＤＦはチェヨの出身のシニャンガだけだった。

ＣＣＭの得票率は、大統領選で６２％、国会議員選で５９％であった。これを強いと見るか否かは、意見の別れるところだが、一時のムレマ人気のことを考えると大勝利といえよう。それは唯一の全国組織が特に地方において威力を発揮したこと、「国父」ニエレレの精力的なキャンペーンがまず上げられよう。野党側の足並みの乱れ、またＣＣＭ側の資金に物を言わせた物量攻勢も目立った。これはムレマに危機感を持ったインド系商人がＣＣＭに援助を注ぎ込んだこと、タンザニア人実業家のＣＣＭからの立候補、さらに現職大臣・高級官僚による役所の金を流用した選挙運動と枚挙に暇がない。このため地方の公務員の給料遅配はおろか、公共事業がストップして再開のメドも立たないのもある。勿論、投票・開票における不正も公然の事実であり、全国４万カ所以上にのぼる投票所を、２５０人程度の国際監視団が監視しきれないのは自明であるから、ＣＣＭの勝利は最初から決まっていたと言える。

それは現体制下で利益を享受している層がなりふり構わず利権を守ったということだが、さて圧倒的多数の民衆はどう行動したのか？　私の親しい友人たちと雑談していて得た感触は次の通りである。

総計　１８名（内女性５名、２０代８名、３０代７名、４０代３名）
出身－キリマンジェロ３、モロゴロ５等、ダルエスサラームなし
大卒１、高卒２、中卒４、小卒９、小中退２
支持政党　ＣＣＭ　１０（投票者－１回目９、２回目５）
ＮＣＣＲ　５（投票者－１回目３、２回目１、非登録１）
ＣＵＦ　３（投票者－１回目２、２回目１、非登録１）

私の友人たちは官公庁に勤めたりしているエリートはいず、裕福な層も一人だけしかいない。水道や電気の職人や非熟練労働者で、収入面から見ると中の中クラス、ただ失業者

はいないという一般的な民衆層である。普段は役人の汚職、非能率を非難あるいは笑い飛ばす非体制側の人々であるが、その投票行動はかなり保守的である。特に２回目の投票には、野党支持層は殆ど参加していない。これは焦点であった大統領選挙の大勢が決していたため、止むを得ないところもあるが、このためダルエスサラーム選出の国会議員の７議席の内６議席までＣＣＭに与え、腐敗で名高い前ダルエスサラーム市長や大蔵次官の当選を許す結果になってしまった。

勿論ＣＣＭに投票した人間が全て熱烈に支持していた訳ではない。夜警をやっている男はＣＣＭ党員であることを公言している（一党独裁時代は身の安全のため党員になる者が多く、また今でも１００万人以上党員がいるという）が、ＣＣＭの候補者が野党支持ないしは浮動層と見られる者の登録証を２万シリング（＝約３５００円、最低賃金クラスの１カ月分の給与）で買っている（そして焼き捨てる）と聞くと、必死に売り込みに歩き、ＣＣＭ党員であることが分かって当然買ってもらえないのだが、「ＣＣＭなんて皆泥棒だ」と毒づきながら翌日はＣＣＭに入れたと言う。またザンジバルのＣＵＦ支持者は、自分はＣＣＭと熾烈に対決しながら「本土はＣＣＭに勝ってほしい」と言う。

そうした消極的なＣＣＭ支持は、一つは反体制側の有力候補であったムレマの「汚職摘発」一点ばりの運動に何とはなしに不安を持っていたこと。最も教育レベルの高いキリマンジェロのチャガ人が各地の実業界に進出していることから、漠然とした反発が一般にあることもチャガであるムレマが伸び悩んだ一因であろう。

私は７５～７６年というウジャマー政策の高揚期にタンザニアに滞在し、「国」を建設するという熱気を垣間見た。その後８４年に再びやってきて、経済の破綻、人々の苦境・無気力を見、その民衆に「開発税」という名の人頭税を課す国家に対し、「植民地時代の方がましだ」と言う人々。更に「もう一度植民地にして、行政を外国人がやらないと駄目だ」と放言する「援助」専門家の言に本音では同意する日本人の多いことを見るにつけ、「国家」というのはタンザニアを含め、アフリカの民衆に何をもたらしたのだろうかと本当に疑問に思った。西欧や日本のような「国民国家」を課せられて、民衆にいいことがあったのだろうか。当時解放を目指して戦うＡＮＣの若者たちも、いったん南アフリカが解放された時、国家官僚として民衆を収奪する側に立つのだろうと思った。

私は「国家」「権力」に対してかなり決定的な不信感を持っているが、それでもタンザニアで生活するためには「日本国」とある程度折り合いをつけないと生きられない。タンザニア人にとって「タンザニア国」の存在がかなり負担になっているという事実と、でもそういう「国家」でも必要だというところをタンザニア人はどこで折り合いをつけているのか。植民地支配を経験したことのない沖縄以外の日本人には分からないのかもしれない。「国家」が存在しないような状態になってしまったソマリア、「国家」の有り様が変わると、その度に「国家」の名で殺されたり、百万単位で難民とされるルワンダ、ブルンディのことに思いを馳せると、タンザニアには一度もクーデターや内戦がなく、タンザニア難民がいないことに気づく。ということは、今回の総選挙でのタンザニア民衆の選択は、その気質（厳しい独立闘争を経験していないことから来る温厚さ、やさしさあるいは根性なし）に帰せられるだけでなく、もっと大きなタンザニア人の知恵なのではないかと考えさせられる。口では汚く罵り合っても、翌日は笑って一緒に仕事をしている人々。この人たちは慌てず「国家」という厄介な物を飼い馴らしていくのではないかと、ふと幻想してみるこの頃である。　（１９９５年１１月２６日記、未完）

楠原　彰

アパルトヘイト、ノー！
ア・ルッタ・コンティヌーア！
ー豊かな関係（交わり）を求めてー

アパルトヘイトとは、南アフリカの白人少数政権が多数の黒人・カラード・アジア系の人々を支配するためにつくりあげた国家装置だった。それは、皮膚の色や人種・民族の違いを基準にした「隔離」と「抑圧」と「支配」の法体系であり経済・文化のシステムだった。そのなかで人々はさらに、性・学歴・障害・出自・・・などの違いによって、二重に三重に互いに引き裂かれた。その上に人々はまた、かかる装置・システムによって、自然や精霊や神々との豊かな「関係」（交わり）からも無残に引き裂かれたのだった。

アパルトヘイトとたたかってきた人々は、抽象的な抑圧や差別とたたかってきたのではなく、衣食住に勝るとも劣らず大切な、この人と人、人と神々や精霊、人と自然、人と歴史・・・などとの豊かな「関係」（交わり）を取り戻したり、つくりなおしたりするためにたたかい続けてきたのであった。

マンデラ新政権が誕生し、民族や人種によるアパルトヘイト（隔離）は法的に禁止されたが、人々の不幸と悲しみの元凶たる現実の貧富や性や障害の相違に基づいた「隔離」「引き裂き合い」、それにまた人々の自然や神々との歪んだ関係は消滅したわけではない。ア・ルッタ・コンティヌーア（Struggles continue）！、たたかいは続くのである。

これはまた、私たちのたたかいでもある。

■■・■・■

１９６３年暮れに開始された日本の反アパルトヘイト運動が、最も大きな盛り上がりを見せ始める時期である１９８７年に刊行され、マンデラ新政権誕生後の今日までほぼ毎月絶えることなく続いてきた本誌『あんち・アパルトヘイトニュースレター』が、今号をもって終わる。最初の編集責任は言い出しっぺの森下ひばり（裕子）さんが引き受け、すぐに高柳美奈子さんに引き継がれ、そしてアンカーは須関知昭さんだった。本当に御苦労様でした。今も翻訳でかかわっておられる現在岩手在住の弘中敦子さんなどは、最初っからのコントリビューターだった。このニュースレターを運動の情報紙として不動のものにしたのは高柳さんであり、一番困難な時期をささえたのは須関さんとそのご家族の方々であった。再度、ごくろうさん、と言わせて下さい。

現在西ケープタウン大学は世界各国の反アパルトヘイト運動の資料・文献を

集め、保存・展示する動きを始めているという。日本の各地で出され続けてきた反アパルトヘイト運動の資料・パンフ・ポスター・文献などとともに、本誌も合本・製本して西ケープタウン大学に送り届けたいものである。これらの資料等は、一部は日本国内に一括して保存されなければならないだろう。

私たちが運動にかかわるようになってからの「名誉白人」の３０年の歴史（政府・企業・市民のアパルトヘイトとの具体的な関係）は、しっかりと記録されければならないからである。

とくに日本政府や企業と南アフリカのみならずアフリカ諸国やアジア諸国との関係のありように対する監視・批判・告発の力や意志が、市民社会のなかに衰弱しつつある今日、こうした作業は重要だろう。それと違ってマンデラ新政権の健康さは、新生南アフリカ社会内部にたくさんの批判勢力を抱えているところにある。　新生南アフリカ社会への私たち市民のさまざまな援助・支援は、かってのアパルトヘイトへの加担にほおかぶりしたまま、以前同様国益と法人利益を優先させてポスト・アパルトヘイトの新生南アに食い込もうとしている政府や企業を監視・批判する運動と同時になされなければ、私たちは三度目の「名誉白人」の時代を迎えることになろう。

そうした姿勢がなければ、自衛隊のモザンビークやルアンダへの派兵、ナイジェリア政府によるケン・サロウィーワ氏への処刑といった事態になんら迅速な対応ができないだろう。しかし、こうしたことは他人に求めても始まらないのであり、そう考えた人がまず動き出すほかはないのである。

過去に学びながら、今と明日に向かって！

豊かな交わりを求めて！

ア・ルッタ・コンティヌーア！

高林敏之

南アフリカから西サハラへ
－民族解放の問題は終っていない－

アフリカ現代政治史に関心を持つ研究者の卵として、反アパルトヘイト運動に、本当に外縁のところで、関わってきました。集会への参加、南ア産品ボイコット、アフリカ協会に在職した折りのささやかな協力位しかしませんでしたが、それでも、自分の思いを多少なりとも行動で表現していなければ、本当に大きな悔いが残ったでしょう。ただアフリカについて研究して知識だけを得て、悦に入っているなんてことは、したくはなかった。

ＪＡＡＣは、いろんな問題に関与したり関心をもつ、雑多な人々の集合体だったと、認識しています。おそらく政治的にアパルトヘイトが終結した後、それぞれの方が新しい活動に踏み出しておられることでしょう。僕の方は数年前から、アフリカ大陸北西部にある西サハラの問題に関わっています。アパルトヘイト終結後、アフリカ大陸に残った最後の植民地問題です。この文は皆さんに西サハラ問題を知り、関心を持っていただきたいと願い、その概要を紹介するものです。

西サハラ問題とは

このニュースレターの読者の方でも、西サハラと聞いてすぐにピンとくる方は、多くはないと思います。西サハラはかつてスペインの植民地でしたが、サハラウイ（西サハラ住民）の独立運動の高まりと、国際社会の圧力によって、植民地の地位からの解放を目前にしていた1975年11月、北の隣国モロッコが35万人の国民を動員した「緑の行進」、それに続く軍事侵攻を強行しました。スペインはその圧力に屈し、モロッコと、モーリタニア（西サハラの南の隣国）に西サハラを分割譲渡してしまいました。独立当時からこの地域への「歴史的領有権」を主張していたモロッコが、国際司法裁判所によってその主張が認められなかったことと、住民投票で独立派に勝つ自信がなかったことから、力づくの占領を強行したのです（奇しくも、インドネシアによる東チモール占領と同じ年でした）。

以後20年、モロッコは西サハラに居座り続け（モーリタニアは79年に撤退）、17万ともいわれるサハラウイ難民が、アルジェリア領内の難民キャンプで生活し続けています。彼らは亡命政府「サハラ・アラブ民主共和国」（ＲＡＳＤ）と独立運動組織ポリサリオ戦線のもとに自らを組織化し、アルジェリア政府やヨーロッパのＮＧＯ、キューバなど各国の支援を受けながら、キャンプ内で行政、学校、病院、試験農場などを運営しています。彼らの祖国西サハラは、モロッコが建設したサハラ版万里の長城「砂の壁」によって国土のほぼ全てを囲い込まれ、サハラウイ難民やゲリラの入国はほぼ不可能になっています。モロッコ占領軍は南アフリカ製の武器も使用していたことが知られており、一部はキャンプ内の捕獲兵器展示場で公開されています。

国連和平プランの行き詰まり―日本政府の態度

この西サハラで、91年に国連の仲介による停戦が成立、国連の和平プランに従い、「国連西サハラ住民投票組織ミッション」（ＭＩＮＵＲＳＯ）の監視のもとで、住民投票が92年１月にも行われる予定でした。ところがモロッコはすでに同意済みだった有権者資格に異論を唱え、その後も監視要員の人選などにさまざまな難癖をつけるなど妨害を続け、住民投票は延期され続けたまま、４年を過ぎようとしています。この間モロッコは駐留軍の削減を実行しないばかりか、約12万人ともいわれる自国民の駆け込み入植、モロッコの国政選挙の占領地での実施など併合強化策をとりつづけ、独立派サハラウイの抗議行動に弾圧をつづけています。92年に就任したガリ国連事務総長はユーゴやソマリアで示した熱心さとは裏腹に、西サハラ問題ではモロッコに譲歩し続け、今年に入って、国連財政の悪化と和平の行き詰まりを理由に、ＭＩＮＵＲＳＯ撤退の方針を打ち出し、安保理からも了承されました。サハラウイ難民の帰国の夢は、４年も引き延ばされたあげく、遠退こうとしています。

日本ではＰＫＯをめぐる議論があれほど盛んだったにもかかわらず、ＭＩＮＵＲＳＯの件は国会でもメディアでも、ほとんど問題にされませんでした。内戦再発の危険がまだ大きかったモザンビークや、フランスのアフリカ政策の尻ぬぐいのためルワンダに自衛隊を送るのなら、なぜ西サハラの住民投票監視に人を送ろうとしなかったのか。もし日本が人を送っていれば、モロッコに対する暗黙の圧力になり得たのに。それどころか停戦直後の91年９月に、皇太子がモロッコを「王室間の友好親善のため」訪問しているのです。日本政府はモロッコに誠実な住民投票への協力を求めるべき時に、塩をおくったわけです。露骨な皇室の政治利用でした。

西サハラ問題と南ア、アフリカ

さて、西サハラと南アの関係ですが。サハラウイの亡命政府ＲＡＳＤとポリサリオ戦線は、同じ植民地（的）支配からの解放を求めるアフリカ人の運動として、南アのＡＮＣやナミビアのＳＷＡＰＯと友好関係を保ってきました（『わたしたちのナミビア』をお持ちの方は、第１部をもう一度ご覧下さい。西サハラとポリサリオへの言及があります）。ナミビアは90年の独立後、ただちにＲＡＳＤを国家承認しました。ところが94年にスタートした南アフリカのマンデラ政権は、ＲＡＳＤ承認に踏み切ろうとしませんでした。

62年にマンデラ氏が投獄されたころ、西サハラの解放運動はまだ出現していませんでした。それどころかモロッコがモーリタニアの併合さえ主張していた時代で、モロッコはアフリカの細分化に反対するものだと自己の立場を正当化して、アフリカの急進的なリーダーたちを味方につけていました。マンデラ氏はこの時期モロッコから援助を受けていました。彼が獄中にある1970年代に西サハラでは急速に独立運動が台頭し、モロッコの占領に対して76年にはＲＡＳＤの建国を宣言、82年にはアフリカ統一機構（ＯＡＵ）にも加盟を

認められ、マンデラ氏が釈放された90年までには75ヵ国（すべて第３世界ないし非同盟の国）の承認を得るまでになっていました。アフリカでは承認国が33ヵ国に上り、アフリカは外交的・精神的にサハラウイ解放闘争の最大の支援者でした。しかしマンデラ氏にとって西サハラの独立運動は事実上、未知の存在であり、モロッコを分裂させる分離主義運動と見えたのでしょう。釈放後のマンデラ氏はモロッコを再三訪問し、明らかにモロッコに対し友好的な姿勢を示しました。

マンデラ氏が釈放されたころには、アフリカ全体が独裁打倒・民主化の波に洗われ、外交面でＲＡＳＤを支援してくれた政権も少なからず退陣しました。民主化後の政府は（共産圏崩壊の影響もあり）例外なく経済再建・援助獲得を最優先し、西側先進国や国際金融機関の要求する経済自由化政策に黙々と従っています。当然ながらフランスがバックについたモロッコの抱き込み工作に乗る国が増え、国連和平プランのスタートによってこの傾向が目立ってきました。最大のＲＡＳＤ支援国アルジェリアの内乱、キューバ（同じ旧スペイン領としてサハラウイの留学生受け入れや医療援助など熱心な支援をしてきた）の苦況が重なり、住民投票がいっこうに実現しない中、サハラウイの独立闘争は一転して苦況に立たされています。この状況はマンデラ大統領率いる新生南アの誕生によって皮肉にも悪化しました。アパルトヘイトの終結によってアフリカでは非植民地化の課題は完全に終結したとのムードが広がり、ＯＡＵ解放委員会は94年に解散されました。ソマリアやルワンダ、シエラ・レオネなどの内戦が繰り返し議題に取り上げられるにもかかわらず、西サハラ問題はＯＡＵで全くといっていいほど扱われなくなりました。サハラウイはＯＡＵに「独立国」の資格で加盟しているのだから、西サハラ「非植民地化」の問題は存在しないのだと言わんばかりに、アフリカ諸国の「民主化」政権は頬かむりを決め込もうとしているようです。アフリカで大きな発言力を持つことになった新生南ア・マンデラ大統領のモロッコへの友好的な態度が、この傾向をいっそう強めたことは、否めません。

今年半ばになって、南アがついにＲＡＳＤを承認しました。ポリサリオ戦線と友好関係にあった若手のＡＮＣ幹部や、マンデラ大統領と親しいキューバのカストロ議長が、同大統領を説得したものと考えられます。これによってサハラウイの窮状が大きく変わるわけではありませんが、停戦発効後初めての承認でもある南アのこの承認は、西サハラ問題の存在をアフリカで再び喚起し、なし崩し的に併合の既成事実化をすすめるモロッコに対する牽制にはなるでしょう。ナイジェリアの人権問題と同様、西サハラの問題でも公正な住民投票の実現のために積極的な役割を果たしてくれることを、アパルトヘイトをついに打ち破った南アに期待したいものです。

西サハラ問題解決に支援を！

僕たちは、西サハラにおける公正な自決住民投票の実現を支援するため、1991年に「日本サハラウイ協会」という、ささやかな支援活動をスタートしました。その後、前述のような状況の変化もあり、暗中模索の状態でなんとかやってきました。この間、各種旅行ガイドブックの西サハラ表記の改正（モロッコと統合したことになっている地図や記述を改

めさせる）、サハラウイ女性組織への多田謡子人権賞授与の実現など、いくつかの成果をあげてきましたが、まだまだ力不足です。

3年前から、パリ（グラナダ）ーダカール・ラリーが西サハラ占領地を通過するようになりました。多くの難民が国外で暮らしていることも、占領地の人権侵害も全く知らせることなく、モロッコ統治の平穏ぶりを見せつけるかのように、ラリーは全世界に衛星中継されているわけです。国際紛争地帯を占領国の後押しのもとに通過するラリーは、あからさまな政治的イベントです。当面、ラリーへの抗議を最大の課題と考えています。なんとか中止に追い込めないものか。

フランスの核実験が植民地ポリネシアで実行された事実が示すように、植民地問題はまだ地球上から消え去ってはいません。ドゴール主義者のシラク大統領率いるフランス政府は、その任期中（1998年）に住民投票が予定されるニューカレドニアの独立阻止を狙っています。核実験は植民地堅持のデモンストレーションでもあるのです。そのフランスにとって、ハッサン国王率いるモロッコはアフリカ政策の重要な先兵であり、西サハラ非植民地化の妨害に最も加担している先進国がフランスなのです。こうして核実験の問題は西サハラにつながってきます。西サハラと同じタイプの占領問題である東チモール問題もあります。植民地に限らず、チベットやクルドなど、少数民族・先住民の自決の問題は世界中にあふれています。民族解放の問題は過去の問題ではなく、現在進行形の問題です。

千島列島をアイヌ民族など先住民へのことわりもなしにロシアとの間で分割し、その条約をもとに北方4島を「歴史的に固有の領土」だと強弁する日本の植民地主義根性（ロシアもこの点は同じ）。モロッコといかに似ていることか！西サハラの自決闘争を直視することは、「北方領土」問題を先住民の存在を視座に入れて考え直すことに、直結していると考えます。

植民地の問題、「民族自決」の問題にまだまだこだわりたいと思われる方、ぜひサハラウイ支援運動づくりに協力して下さい。知恵を貸して下さい。関心のある方はぜひ下記まで連絡をよろしくお願いします。

〒154 東京都世田谷区上馬1-26-2　柳沢荘　高林気付（暫定住所）
日本サハラウイ協会　TEL/FAX 03-3422-5173
（お手紙またはＦＡＸの方が連絡は確実です。）

森川　純

日本の反アパルトヘイト運動において中心的な役割を演じてきたＪＡＡＣ東京（アフリカ行動委員会）が四半世紀に及ぶその活動に終止符を打つ、との報に接し、感じた事を記してみたい。

昨春のマンデラ政権の誕生と多人種協調・民主社会への南ア再編着手、という劇的な出来事は、とりもなおさず、南ア内外での反アパルトヘイト運動の主要目標が実現したことを意味していた。従って今回の事態の到来は、いわば時間の問題であったし、また喜ばしいものとして受け止めるべきものなのであろう。

しかし私自身は以下の理由から今回の事態を率直に喜べないのである。

第一は、日本政府・財界が過去に人種差別主義政権の延命に大きく貢献するような諸々の行動をとり続け、従ってＪＡＡＣは言うまでもなく南アの反アパルトヘイト勢力やＯＡＵや国連等からも厳しい批判をあびてきたにもかかわらず、黒人多数派政権が成立するやいなや、一転して、アパルトヘイト政策・体制の犠牲者であった黒人社会への共感と支援を活発に主張しはじめたからである。例えば今夏のマンデラの国賓としての来日中の７月３日にＳＡＴＡ（南部アフリカ貿易懇話会）がそのメンバー企業と共に英字紙『Asahi Evening News』に出した来日歓迎の大きな広告は“歴史健忘症”が、いかに深刻な状態にあるかを如実に示したものと言えるのではないだろうか。

我々はプレトリアが重大な危機に直面していた1984年という時点においてＳＡＴＡが日本政府の暗黙の支持の下に設立されたこと、また、ＳＡＴＡが国際社会の南ア制裁強化の要請に抗するかのように人種差別主義政権との人的交流や通商貿易関係の維持、強化に努力することによってプレトリアに大きな物的、技術的、財政的、心理的支援を与えてきた事実（1986年、87年と連続して日本は南アにとって最大の貿易パートナーとなる）を忘れることは出来ないのである。

1983年1月20日に東京で開かれたシンポジウム『南アフリカの人種差別主義政策と日本の役割』（主催：朝日新聞社、国連広報センター）において基調報告を行った駐日タンザニア大使アーメド・ハッサン・デリア氏が、当時の日本の行動について次のような厳しい批判・注文をした事実を想起することは有益であろう。「まず第一に巨額な貿易を通して南アフリカのアパルトヘイトを支援することをやめ、日本の総合商社がナミビアの資源を輸入し、ナミビアへ投資するのを禁止すべきです。私たちはアフガニスタン問題で日本がどのようにソビエトに対して経済的制裁を課したか、目のあたりにしてきました。従ってこれは可能です。日本は南アフリカに対して経済制裁を課すべきです。」（国連広報センター『アパルトヘイト－日本にとっての意味－』1983.5.1.P14）

しかし残念なことに、これまでのところ政府・財源の過去の問題行動や、それをあたかもなかったかのようにふるまうことに対する批判や反省を求める動きは、政界、マスコミ、学会、宗教会、労働界、等においても十分に出されているとは言えず、むしろＯＤＡの積極的供与によって“免罪符”を与えているかのような状況にある。

そうした大きな“無責任体系”の存在が今回のＪＡＡＣ東京の解散を率直に喜べない第二の理由として述べられよう。

問題は脱冷戦、脱アパルトヘイト時代への移行を背景にアフリカ一般や特に南アでの援助活動を積極化させつつある日本のＮＧＯや、そのゆるやかな連合体としての「アフリカ日本協議会」においても上述した憂慮すべき傾向がみられることである。

例えば過去の日本のアフリカとの関係は基本的に“対等かつ非搾取的であったのか否か？”という問題意識から日本政府・財界のこれまでの主張や行動を多面的・総合的に検討し、問題点があれば、その旨率直に提示し、反省と改善策を求めることはＮＧＯとしての立場から言えば当然なすべき責任であり、義務でもあると考えるが、残念ながらそうした取り組みは不十分なままに放置されている。

だがそうした傾向のもつ問題性は第一に、政府・財界の自省や自浄能力の欠如、また新生南アは日本のＯＤＡや直接投資を必要とするから過去の事はとやかく言わないであろう、といった“力は正義”的な発想の存在。第二にマンデラ政権側の弱い立場、つまり「復興発展計画」（ＲＤＰ）の成功を最優先させる立場では旧人種差別主義政権の支持者であった欧・米・日に対しても和解＝免罪政策を適用させることによってＲＤＰへの参加、協力をとりつける必要、といった文脈の中で捉えるならよりよく理解できよう。

しかし、ことは“歴史健忘症”に対する曖昧な姿勢だけにとどまるものではない。というのは、そうした姿勢の原因及び結果でもあろうがＮＧＯの諸活動－①援助、②教育啓蒙、③人的交流、④監視や調査研究に基づく批判、注文、代案の提示を含む、Watch-dogとしてのそれ－、において本来的に大きな意義をもつ④の活動が二次的に取り扱われている傾向が認められるからである。

日本－アフリカ関係において主導的な役割を演じてきているのは政府・財界であり、ＮＧＯのそれは未だ残念ながらマイナーなものであること。またＮＧＯによるアフリカ民衆支援は現地での活動のみならず、日本国内でも政府・財界の思考、行動様式を好ましい方向に漸進主義的でも変革していく、という方法によっても又可能であることを考えると、ＮＧＯ側のWatch-dog活動に対する消極的な姿勢、言い換えれば政府・財界に対する宥和主義的な姿勢は、活動面から言っても、ＮＧＯとしての自立性の確保という観点からも、バランスがとれているとは言い難い。

ＪＡＡＣ東京の解散を率直に喜べない第三の理由、それは以上の状況の原因及び結果かもしれないが、新生南アの誕生を機会に日本における反アパルトヘイト運動の歩みを跡づけ、そこから様々な教訓を引き出し、今後の日本－アフリカ関係の発展に生かそうといった関心や対応がＮＧＯ（界？）においても鈍いように思われるからである。

日本の反アパルトヘイト運動が新生南アの誕生にいかなる貢献をしたか、という問いに対して過大な評価を与えることには慎重であるべきであろう。しかし、他面、広範かつ持続的な教育啓蒙活動の展開によって日本国内でのアパルトヘイト問題やナミビア問題等、さらにまたそれらの問題と日本との関係について関心を惹起し、広め、深めてきたこと。また外交官やビジネスマン中心で“白人－名誉白人”間中心の人的交流に対して、反人種差別主義的な民衆間の交流を試み、定着させてきたこと。さらに一貫した厳しいWatch-dog活動によって日本政府・財界の行動を一定程度にせよ規制してきたこと等については過小

評価すべきではないだろう。

1957年のガーナ独立以来、多くのアフリカ諸国が独立を達成したが、その内実は乏しく、対外的従属性の克服や民主的な国民統合、経済社会発展の実現は大きな課題となってきた。脱冷戦、脱アパルトヘイト時代への移行をむかえた今日、そうした課題への取り組みがアフリカ内外で再び声高に叫ばれつつある。そうした状況下で未だ発展途上段階にある日本のNGOは、いかに考え、行動したらよいのであろうか。勝俣誠氏はその点に関して“相互変革”の理念を紹介しつつ次のように述べる。「すなわち、経済的に優位にある日本が、経済的に劣位にあるアフリカを開発を通じて援助するという従来の考えから一歩進み、日本側もこの民際交流を通して、自らと自らの属する日本の社会を変革していくという姿勢である。」（川端正久編『アフリカと日本』勁草書房 1994 P.273）

同氏の主張に共感しつつ、筆者は次のように補足してみたい。つまり、相互変革といっても日本－アフリカ関係は力関係の大きな格差を背景に日本優位で行われてきたのみならず、関係の中身も名誉白人＝ジャパニーズやエコノミックアニマルという言葉が象徴するように、自由、平等、社会的公正さ、人間の尊厳、といった民主主義的な価値に基づく関係とはいえないものが支配的であったことを考えると、変革は相互に必要であっても、特に日本側のそれが、そしてまた変革は個人や社会にとどまることなく政府のアフリカ外交政策や財界のアフリカ民間経済外交に対する民主的コントロールの実現をまた視野に入れたものが必要となろうし、望まれるのである。

外交の民主的統制ということを考え、機能させることの重要性についてE・H・カーはその著『危機の二十年』（岩波書店1952）P.３において次のように記している。「1914-18年の戦争は、戦争が単に職業軍人のみに関係ある事態だとする見解に終止符を打ち、同時にこの見解に対応して抱かれていたところの、国際政治は職業的外交官の手に委ねておいてよいという漠然とした考えをも消散させた。国際政治を民衆のものにするという運動が英語国家において秘密条約反対の世論をわきたたせるという形で始まった。秘密条約に対する非難は、政府のとった邪道にではなく、国民の示した無関心の態度にこそ向けられるべきものであった。そのような条約が締結されたということは、誰もが承知していた。けれども、1914年の戦争以前は、これらの条約について大部の人は関心をもつこともなく、また異議を唱えてもだめだと感じていたのである。しかしながら、秘密条約反対の世論をわきたたせたことは、きわめて重要なことであった。それは、国際政治を民衆のものにしようという要求の最初のきざしであり、一つの新しい学問の誕生のさきぶれをなすものであった。」

日本のアフリカ外交と民衆との関係は未だ1914年以前の段階にあるのでは、と感じてしまうのは恐らく私だけではあるまい。

最後にJAAC東京は解散となっても、これまでの成果や教訓を生かしながら、そしてまた各地のJAAC（広島、大阪、京都、名古屋、熊本等）における活発でイノベーティブな活動からも刺激を受けつつ、南アに限らず広くアフリカ地域一般と日本との関係のあるべき姿について考えたり議論したりする場合なり空間が、近い将来生まれることを期待してペンを置きたい。

牛嶋保夫

テンベリーヘル

THEMBELIHLE 夜の物語

シャテラックと二人、夕暮れの道を行く。茜色の空とその上にわずかに残っているブルーの空間に星が輝き出した。Ｃａｍｐの家並と広い空が前面にひろがり、疲れた体にはこの下り坂の道は心地よい。昼間の暑さを忘れさせてくれるように風が通りぬける。そして、帰れば部屋には薪ストーブに火が入れられ、程良い暖かさになって、夕食が迎えられるだろう。

僕とシャテラックは、ずいぶん前から手をつないで歩いている。離したい気持ちもあるが、何か悪い気がしてこのままでいる。早く家に帰りたい僕なのだが、シャテラックが会う人ごとに立ち話をして、もう何人になるだろうか。「本当に君はおしゃべりだね、まるでスピーカーだ、そうだ、これからスピーカーと呼ぶことにしよう。」と僕が冗談を言うと「ＯＫ、ヤシオ」と彼が言い、握手をして、それから手を握ったままの状態なのである。

また、彼が立ち話を始めた。家に着くまで、まだ大分かかりそうだ。ここらで握った手を離し、道端にしゃがみこんで彼を待つことにしよう。もう居候して一週間になる、ここTHEMBELIHLE（テンベリーヘル）Ｃａｍｐの様子や、彼と妻のグローリーのライフヒストリーなどを忘れないうちにメモしておこう。そして、僕の切れ切れに語ったライフヒストリーのことも。

THEMBELIHLEとはgood-hopeという意味があるそうだ。1980年代中頃から人々が集まり始め、今では35,000もの人々が暮らしている。コミュニティーセンター（保育園とその調理場、簡易保健相談所、スポーツ振興所、それにシャテラック、アイザック、ウィリアムスの三人でつくっている農業事務所がある）を取り囲むように家々は緩やかな南斜面に並んでいる。方々の農村から職を求めヨハネスブルグに来た家族が多いようだが、このＣａｍｐから市の中心街まではクンビ（小型バス）で40分はかかる。また、80年代中頃からの反アパルトヘイト運動の高まりのなか白人家族がイギリスなどに帰ってしまい、そこを解雇されこの地に移り住んだ人達もいる。夫と妻が定職についている家族の子供は近くの学校に通っているようだ。しかし、老人やかなりの若者が職に就けずにいて、時々その若者が僕を見つけると「カラテを教えてくれないか」と声をかけて来る。

庭の広さも、家の大きさもまちまちだが、おおよそ70坪から150坪くらいの庭には、そのほとんどの家で野菜類（カボチャ、トマト、青菜、サツマイモ、レタスなど）を栽培しており、マリーゴールドやバラを植えている家もある。家のつくりはいわゆるバラック建てで、トタンやレンガ、それにビニールを使っていたり、また木を使った家もある。シャテラックの家は屋根と外壁がトタン張りで、夕方など雨が降るとタカタカという音が聞え

る。家々は、外から見ると貧相に見えるつくりだが、部屋に入ると実によく掃除が行き届き、気持ち良い。台所には必ずと言ってよい程、この国でつくられたキッチンストーブがあり、煮炊きにはこれを使う。なかにはお手伝いさんをしていて、その“マダム”からもらい受けたという立派な電気コンロを持っている家もあり、やがてこのTHEMBELIHLEに電気がひかれるようになれば、使われる日が来るのだろう。水は共同水道がＣａｍｐの何か所かにあり、水汲みは主に子供達の仕事のようで、一輪車や頭に乗せて運んでいる。定職に就いている家の多くにはバッテリーで見られる白黒テレビがあり、夜になると家族で見ている。

またホームレスキャンプと言っても、皆、ＡＮＣ発行の証明書を持っており、来年からは新しく住宅建設が始まっていくようで、その説明会も開かれているらしい。しかし、その建設資金や返済方法などは、一人ひとり皆解釈が違っていて（もちろん僕の英語力のなさが原因だが）はっきりしない。いずれにしても、この地が新しい住宅地として生まれ変わるにはかなりの時間が必要だろう。

一方で、もうＣａｍｐのすぐ隣りにはインド人や黒人の高級建売住宅が並んでいる。道一本隔ててだ。これはTHEMBELIHLEの秩序の良さを示しているとも言えるだろう。さまざまな土地から、さまざまな言葉を使う人々がここに集まり、皆肩を寄せ合って生きている。少なくとも、この地域では日本でよく言われる“部族抗争”の様子はない。もしそうしたものが起こるとすれば、それはきわめて政治的に仕組まれたものに違いないのだ。コミュニティーセンター内にある保健相談所を手伝うズールー出身の若い女性は、「私はＡＮＣの支持者」と言って、その少年少女のブラスバンドの指導にあたっていた。またシャテラックの仲間で、ウィリアムの妻であるンデベレ出身の女性は、夫の政治的無関心と違い、夫婦二人の寝室にびっしりとＡＮＣとマンデラの写真が張ってあった。少数だが、地方選挙の最中でＰＡＣのポスターを家の塀に張ってある家庭も見受けられたが、その家のママは、この地域のＡＮＣの勝利集会には、朝早くから祝いの炊き出しに参加していた。このママは、私を見かけると「また、そんな汚いかっこうして。洗濯してあげるから全部服を脱ぎなさい」と言ってくれるのだった。また、ちゃっかりと朝食などをとらせてもらった時など、その早口のしゃべりで「もし政党やＡＮＣ内部でポスト争いばかりやっていれば、Wake upagain Apartheid」と言い、「今までは黒人がたくさん死んだけれど、もし逆戻りするようなことになれば、今度は白人もたくさん死ぬよ」と私に言ったものである。

僕もこの地でひとつの点を見ているにすぎないが、人も社会状況も、複雑で混沌としている。“ズールー　イコール　インカタ、コサ　イコール　ＡＮＣ”などというつくられた「部族抗争」の図式は、日本人の限りない黒人に対する差別感を表したものだと思う。自分もたびたびおかすように、人は自己の都合よい情報と思考を組み合わせ、状況を理解したくなるのかもしれない。それを辛うじて払いのけてくれるのが、新しい人々の出会いであり、交流なのだろう。僕はこの地で過ごさせてもらい本当にありがたい。

最初はこのTHEMBELIHLEの住所が詳しくわからず、大分苦労した。もう他のＣａｍｐをさがさねばと諦めかけていたその時、ヨハネスの中心地で僕よりもやや年上のフレッダという目の美しい混血の女性に会ったのが、このＣａｍｐに入るきっかけだった。彼女はちょうどその時、街の歩道という歩道を占領したかのように並んでいる露店（「Hawker」という名称で、洋服から時計、電気製品やおもちゃの類い、それに野菜にくだもの、惣菜な

どあらゆるものが売られている。この人たちも許可書を持っている）で野菜を買っているところだった。その露店の脇にベンチがあり、たまたま疲れてそこに腰をかけたら、互いに目が合って声をかけたのが始まりである。

「あなた、どこから来たの？　名前は？」と彼女。「日本から、名前はヤスオと言います」。「ｏｈ、ヤスオ、それはどういう意味？」「どういう意味って…。“保夫”－そう、keep husbandって意味になる」と僕が言うと、彼女は腹をかかえて笑い出し、「あなた結婚しているんでしょう」「Ｙｅｓ」、「じゃ、なんで一人で旅しているの？」と聞き返して来た。そしてまた僕と二人で大笑いして、心が打ちとけたのである（自分の名前を、こんなふうに言ったのは初めてだった）。そこで、思い切って「lenasiaにあるホームレスＣａｍｐ行きたくて捜しているんだけど、知ってる？」と訊ねると「そのＣａｍｐなら、私の街のすぐ隣りにある、心配しないで、明日にでも行きましょう。それと、来年、私勉強で３ケ月日本に行くのだけれど、あなたの家にホームステイ出来る？」と彼女。「もちろん。じゃ今日、あなたの家に泊めてもらえるかな」と僕が聞くと「もちろんＯＫ。子供たちも喜ぶでしょう」との返事。（数日後の日曜日わかったのだが、彼女は英国教会の牧師になるために勉強している人だった）。“捨てる神あれば拾う神あり”というところか。

それというのも、フレッダに会う２日前には、これも僕の泊っていたホテル近くのクンビの停留所で、夕方近郊の家に帰る人々の様子を見ていたら、人の良さそうな中年の男性と出会った。しばらく話をしていると、「明日からなら、自分の家に来てもいいよ。小さくて貧しいけど…。」との言葉。翌日夕方待ち合わせの時間に行くが、いくら待っても彼は現われずやや腐ってフラフラしていた。そのところに今度は若者たちに囲まれ、持ち物をあっという間にとられる始末。フッと気が抜けたその時だった。ちくしょう、俺もやられたか、という思いが先に来た。物はどうでもいいが、インドのボンベイの飛行場で知り合い、彼はニューヨークへと行き、そこで別れを告げた同年齢の本当にいい男の住所と、これまたカルカッタで買った老眼鏡をとられたのは悔やまれる。おそらく、彼が僕宛てに便りをくれなければ、もう一生会うことは出来ないだろう。この時ばかりは“まったく何をしているのか”と自問することしきりだった。今思えば、彼が飛行機の待ち時間に「コーヒーでも飲もう」と僕を誘ってくれたのも、言葉も出来ない自分を慮ってくれてのことかもしれない。彼の顔が浮かぶ。「スマンな」とつぶやいた。

こんなことがあったから、よけいに彼女との会話は僕にとってうれしかったのかもしれない。翌日、彼女の車でようやくTHEMBELIHLEに辿り着いたのだった。その後、何かとお世話になった、このフレッダとその家族のことは詳しく自分で書きとめて置かねばいけないだろう。今ひとつ言えることは、彼女の家庭のように中間階層が南アの都市部では確実に形成・増加しており、その誠実な仕事ぶりと技術は南アの基礎経済を支える上で、重要な役割を担っているように僕には思える（このように外国人でしかも乱暴な言い方は僭越だが）。

白い砂と赤い土とが斑模様に見えるこの土地に着いたのは午後の２時をまわった頃だった。皆がじっと僕たち二人を見ている。コミュニティーセンターにまず行き、ひと通りの挨拶をすませた。フレッタは砂ぼこりを残して家に帰っていった。さて、これから何をしようかと木陰で休んでいると、畑に水をやっている人物がいる。それがシャテラックだった。何とも優しく野菜をいとおしむかのようにそれをしている。この人物なら大丈夫、自

分を受け入れてくれるはずだと決め込む。勝手に僕も側にあるジョーロで水やりを始めた。彼がこちらを見ながら、笑っている。彼に近づき握手。「どこから来た？」、「日本だよ」、「トーキョーか？」、「そのすぐ近くだ」、「飛行機で来たのか」、「１５時間以上かかるよ」、「それは遠い」と彼。

よく工夫された畑である。極力農薬を使わないらしい。一つひとつ野菜の名前を教えてくれる。彼がその名前を言う前に僕が答えると、驚いたように「イグザクトリー」「ザッツライト」と言葉が返って来る。「僕も日本で畑仕事をしたことがあるんだ」と言うと、「それじゃ、君は百姓か？」と彼。「いや、今は木で家具をつくっている。去年から始めた。そして、去年の夏、ケガをした」と右手の小指を見せると、「ヒャー、それは痛かったろう」。あたり前だよ、それは痛かった。そんな会話の後、「今夜、泊めてもらえないかな」と図々しく言うと、予想したように「ＯＫ、ノープロブレム」の答え、それでも少しほっとした。

最初、彼と出会った時は髪の毛も白く、髭も白いので（人のことは言えないが）、もう６０才近い年齢かと思ったが、僕とほぼ同世代であった。あと二人の仲間であるアイザック、ウィリアムとでこの３００坪の土地の菜園の野菜や地鶏飼のニワトリを売ったり、病院の土地を借りて、そこの患者に野菜を提供したりして、暮らしを立てているようだ。鶏（これが実にうまかった）が一羽１５ランド（１ランド＝３０円位）、青菜の一束２ランド程だ。売れ行きは、今一つというところ。それでも畑仕事を彼らは楽しんでいる。

この三人のお陰で、ずいぶん知り合いも出来、こっちの家、あっちの親類へと連れていってもらった。僕が後で名付けた「チブク（地酒で酸っぱい濁り酒）ハウス」には時々行き、昼からママたちと飲んだ。少し飲むと皆踊り出し、また飲む。このママたちと道で会ったりすると「チブク・ヤシオ」と呼ばれたものである。

一日目は抵抗があった腰かけ式の昔なつかしいポットン便所も２日目からしっくり来て、久しぶりに新聞紙で用を足した。昔の自分たちの生活と似ている（もちろんアパルトヘイト問題ぬかしてだけれども）。

そして、お世話になって一週間が過ぎようとする夜に「君たちのライフヒストリーを聞かせてくれないかな」と切り出した。妻のグローリーは、すこし照れくさそうにしながら皿洗いを始めたけれど、シャテラックは「ＯＫ、え～と、生まれたのが…」と語り出してくれたのである。

彼は、1948年の６月生まれ、グローリーは1944年９月生まれ。共にナタール出身。シャテラックは小学校を２年で辞め、12才から白人農場で働き始めたという。彼女は14才で白人家庭で家事労働を始め、半年で2.5ランドの賃金を得た。30年以上前にしても、あまりにも安い金だ。シャテラックは1965年からホームランドを出てヨハネスブルグに来たが、これという定職に就けず、２年間に何度も居住区に連れ戻されたという。「何回、刑務所に入れられたか分からないよ」と笑いながら語ってみせる。その後、散髪屋の見習いになり、「今でも上手だよ、ヤシオの髭もきれいに出来る」と僕を冷やかす。そこを３年程で辞め、今度はスーパーマーケットなどで使われる針金で出来ている籠をつくる会社に就職する。一週間の賃金が7.5ランド。ようやく落ち着いたと思ったら、白人の社長が他の土地に会社を移してしまい、７年間いたが放り出されてしまった。1972年、二人は結婚し、二人の子供をもうける。76年にシャテラックが籠会社を解雇された時は、本当に生活が苦しかったらしい。「76年という年はソウェト（SOWETO）の闘いの年じゃないのか？」と僕

が訊ねると、「イグザクトリー、ヤシオ、君はソウェトの闘いのことを知っているのか」と彼が聞き返す。

お互い、話が乗ってきて、僕のひどい英語も調子が出て来たようだ。78年頃からは、二人でビル掃除の仕事を始めたという。シャテラックは主に窓ガラスを拭く仕事。「ロープ一本で高いビルから降りて来るんだよ、風が吹くと…。」「僕も日本でやっていたんだ、風が吹くと体が左右に振られてね。」と、後に続く。「本当にその仕事やっていたのか？」と彼が聞き返す。時は異なるが、共に風に吹かれながらビルの窓拭きの経験を持つ。また共通の話題が出来、うれしくなった。「それに、ビルの掃除も長い間やったよ、中学2年から高校卒業までね」と加えると、彼が「だけど日本は豊かな国なんだろう？　なぜ働かなければならなかったんだ」と、また聞き返して来た。この辺からどちらが聞き役なのかわからなくなり、語り合いになってしまった。「いや、30年以上前、日本も貧しかった。それに僕の父親は、自分が生まれた時、もう54才だったんだ」と言うと、「それはグランドファザーじゃなくて、本当に父親が54才だったのか。本当か？」と彼は繰り返し訊ねて来た。「それに、毎年夏になると病院に入院して、2・3ケ月は動けないんだ」。「病気は何だったんだ」。「マラリアだった」と僕が言うと、アイロンをかけているグローリーの手が止まった。彼女はさっきから僕の短いGパンにアイロンをかけてくれているのである。

シャテラックが、「ヤシオ、君のライフヒストリーも聞かせてくれ」と言ってきた。本当は、もっと彼らの細かい暮らしの事を聞かねばと思いつつ、自分のことをしゃべり出してしまった。時々辞書をひきながら。「父親は65才まで庭をつくる仕事（植木屋）をしていた。だけど、もう体が弱くなり、僕たち兄弟でも出来る掃除の仕事に変わったんだ。それがちょうど僕が中学に入り、しばらくたってからのことだよ。学校の月謝がなかなか払えなくて…。それに、日曜日が来るのが僕はイヤだった。だって友達と約束しても仕事があってダメだったし、日曜日にも学校のユニホームを着なければならなかったから」。「何年やったんだ、掃除の仕事を？」と彼が聞く。「5年間かな」。「父親は生きているのか」「いや、もう20年前に死んだよ、大学を卒業する前にね」と僕が答えると、二人が声をそろえて「ん‥‥」と長いため息。「お茶、もう一杯飲む？」とグローリーが言ってくれる。「いや、もうけっこう、ありがとう。そうだ、最後に二人の夢を聞かせてよ、これからの。」と再び僕が質問をした。

「そうだな、3つか4つの部屋を持つ新しい家が欲しいな。もう30年も40年もアパルトヘイトの下で働きに働いて来たんだ。これ位の夢を持ってもいいだろう、ヤシオ。早ければ来年から新しい家が建ち始めるらしい」とシャテラックが結んだ。「I hope so」と僕。彼が「30年も40年もアパルトヘイトで働いて来たのだから…」と言った時、いつもの表情とは違う、強い調子の表現だった。それはおそらく厳しい生活を強いてきたものへの怒りと、今度こそ自分たちの生活を自らの手でつくり上げていきたいという意志であったように僕には思えた。

まだ短い滞在だが自分なりに考えるに、社会の富とあらゆる権利が白人社会に流れ込む巨大なダムのようなシステムを強固につくりあげたのがアパルトヘイト体制ではないか。その富と権利を人種や民族を越え民衆一人ひとりに循環させていく道筋をつくり始めたその時期のように思える。350年の歴史のツケはあまりに大きい。しかし、南アフリカの民衆は偉大な第一歩を踏み出したことに間違いない。

ところで、僕が彼らに再び質問を向けたのは実は自分で話しているうちに、もう言葉に詰ってしまったからだった。「今日は寝るよ、少し疲れたから、明日また」と僕は挨拶した。それにグローリーは明朝早くヨハネスブルクに働きに行かねばならない日だったのに気付いたからだ。時計を見ると、11時近くになっている。もう一度、彼女が僕の寝るベットを見てくれている。シャテラックが僕の目を見ながら「じゃ、また明日な、ヤシオ。OK、OK」と言う。「また、明日、少し働くから。お休み」と僕。

長いような気がする一日が終わった。洗いたてのシーツに包まれたベッドのなかに身をすべらせる。頭だけが起きているようで、寝つけない。彼らには話せなかった父が死んだ日のことなどが頭をよぎる。もう、あの日ごと頭のなかで辿るしかない。

『初めて行動委員会の仕事（葉書の宛て名書き）を手伝ったその夜、親父は死んだ。自分だけが死に目に会えなかった。その日の午前中に見舞いに行ったけれども、自分には普段とあまり変わらないように見えたので「親父、行って来るからな」と言うと「ああ、気を付けて」と細い声。この時から、かなり悪くなっていたのかもしれない。午後病院に来た母や姉、兄達は、いったんは病院を引き上げたが、様子のおかしいのに気付いて病室に戻っている。その後、父は息を引き取った。自分は最後まで父とつながれなかった。

何も知らず夜中に自宅に戻ると、明りが煌々とついていて母たちが掃除をしている。「何してんだ、こんな時間に」「‥お父さん亡くなったよ。大学にも連絡して、何度も呼び出してもらったんだけど。まだ病院にいるから行ってあげなさい。待っていたんだから…」妙に落ち着いた声だった。家を飛び出し、夜の霧のなか病院に走った。力が抜けた体に霧がからみつく。地下の霊安室に入ると、父は少し微笑をたたえながら気持ち良さそうに眠っている。肌の色も悪くない。だが合掌した手に包帯が深く喰い込み、その部分が鬱血している。その手と痛みを感じていない父の微笑。父はやっぱり死んじまったんだ。頭を少し撫でると、自分の息で傍らの蝋燭が揺れた。「よく生きたよな、親父」と呟く。こんな言葉は死の実感からほど遠い言葉と自分で意識しつつ、それ以上には言葉が出なかった。

見守っていた兄と二人、霊柩車に乗って家に戻る。霧の中ゆっくり車は進む。自分の住む街が、こんなにも静かに感じたことはなかった…』

いつでもはずれちゃうんだよな、自分は。そして俺にはどうにも分からないところがある。それにしても、なんでこのTHEMBELIHLEで過去の自分のことや父親のことなど思い出すのか、それも分からない。そして時々、ここがアフリカなのか日本なのか分からなくなってしまう時がある。柄にもなくこんな感情になっているのは、旅の感傷だろう。しかし、それを自分で排除する気はない。図らずも運動に参加した日、父は死んだ。今、その運動が終わる時、僕はアフリカに居る。この地は自分にとって一つの帰結点なのだろう。また、同時に僕はここで「父への旅」のスタート地点に立ってしまったのかもしれない。

「チブク　ヤシオ、チブク　ヤシオ」とシャテラックが僕の体を揺すっている。どうも道端で居眠りをしてしまったようだ。彼の大きな手がまた僕の体の前に差し出された。その手を僕は再び握って二人で歩き始めた。

渋谷さんへ

田村幸子

先月号『コラム』の渋谷幾三さんの記事を読んで、疑問に思ったので手紙を書きました。（念のため；私は渋谷さんの著書『アフリカの現代人達』も、別冊宝島ＥＸ『東アフリカ（誘惑）読本』も読んでいません。）

渋谷さんの記事を読んでいると、あたかも日本人女性が“ビーチボーイ”を発生させたかのように受け取れます。それに（　　）付きで、－“日本人どころか、白人女性までも”－相手にする－“男娼と化す”－と書いてあります。しかし、ビーチボーイとは、昔から、日本人女性がアフリカで気軽に遊ぶ以前から存在していたのではありませんか？

私がアフリカへ初めて行ったのは８３年。強烈な印象を受け、日本へ帰ってからむさぼるようにアフリカに関する本を読みました。私の“ビーチボーイ”の知識は、それらの本の中から得たものです。ビーチボーイとはケニヤのモンバサなど海岸地方で、保養に来ている裕福なヨーロッパの白人女性達のお相手をする美しい黒人青年達とあったと思います。

私は去年は３カ月、今年は９月始めからひと月半、タンザニアのインド洋に浮かぶ島ザンジバルに滞在しました。ここへはヨーロッパやアメリカからの団体客は来ても日本の団体客は来ません。日本人は、毎日一人二人ポツンポツンとやって来る程度です。ここに住んでいる日本人は、青年海外協力隊の人も含めてせいぜい６、７人だと思います。

しかし、ここにも“ビーチボーイ”と呼ばれる人達がいます。観光客を街に案内したり、観光地へ連れていってホテルを紹介したり、女性の相手をする人達です。去年、この島へ行く時、スワヒリ語の先生から（彼もザンジバル出身）、「女性が一人で居るとビーチボーイが声をかけてくるから気をつけるように」と忠告を受けました。実際、声をかけられましたが、「今、一人で居たいから」と断われば、「そう、じゃぁ」とあっさり立ち去りました。

私は、この島に二年続けて行ったので友達が沢山できました。彼等はバンガローの経営者、ミュージシャン、アーティスト、アンティークショップを経営している夫婦といろいろですが、中でも多いのがビーチボーイと呼ばれる人達です。彼等の勧誘を断わり続ける私を彼等は“お客”ではなく“俺達の友達”と呼ぶようになりました。時には、「金を貸してくれ」と言われ、友達になると大変なこともあるのですが。でも、彼等は親切で、いろいろ私を助けてくれました。おとな達は、彼等は問題が多い、ウソばかりつくと私に忠告します。仕事はいくらでもあるのに、彼等は重労働や汚れる仕事をいやがって、簡単に金が入ってくるきれいな仕事をしたがると批判的です。

しかし、タンザニアは日本よりも学歴重視の傾向が強いようで、二つしかない大学に入れる人の数が限られているので、進級試験に落ちた人達は自分の選ぶ仕事の範囲がせばめられてしまうようです。大学を出さえすれば女性も自分のしたい仕事につく事ができると日本の医大の大学院に留学中のタンザニアの女友達が言っていました。

ビーチボーイの仕事を傍で見ていると、そう簡単でもないようです。観光客に声をかけてもうるさがられたり、断わられたりする事が多いし、約束を取りつけても客からすっぽかされたり、ビーチボーイ同士で客の取り合いになってケンカになったり、天候に左右されたりといろいろあるのです。それでも、「まぁいいさ、明日は仕事にありつくさ」と彼等は楽天的ですが。

“女性のお相手”に関しては、私の眼につかない所で交渉されるようなので、私にはよくわかりませんが、去年、若い白人女性が毎日、昼も夜も同じ黒人青年と連れだって歩いているのを目撃しました。友達に聞くと「あの白人女はあいつに金を払っているのさ」という返事でした。その白人女性のお相手をしていた男性は、今は私の友達の一人です。今年もまた、ビーチボーイを連れたおしゃれな若い白人女性を見かけました。

ザンジバルのビーチボーイ達はこんな様子ですが、彼等が日本人女性の悪影響でビーチボーイという仕事を始めたとは思えません。渋谷さんはビーチボーイについてもう一度調べ直して欲しいと思います。それに、タイトルの“冷戦時代の先進国の援助がアフリカの人々の心に与えたもう一つの悪影響”とは何なのでしょうか？　ここでいう“先進国の援助”とは、騙されやすくお金持ちの日本人女性がアフリカの男性と結婚し彼等に悠々自適の生活をさせてあげる事を言うのですか？

・本来ならば巻頭に『廃刊の辞』か何かを多少の美辞麗句も交えて書かなくてはいけないのでしょうが、廃刊の理由が資金不足では書きようがありません。ようするに倒産なのです。これまでいろいろな側面からご支援いただいた方々には本当にお詫びの言葉もありませんが、新しい出発をめざしていったん閉じさせて頂きます。・本号のために力の入った原稿がたくさん集まりました。ありがとうございました。苦渋に満ちた文章の中に、僕は希望を読み取りたいと思います。かつて本誌の「暗さ」にケチをつけてきたオメデタイ御仁もいたけれど、アパルトヘイト廃止後の南アは明るく描くべきだ式の陳腐なスターリニズム的発想とは別の次元で僕たちは希望を語りたいと思います。しかし、そのためにこそ今の日本と世界の、そして自分自身もそこに含まれるおぞましい姿を直視せざるを得ません。・在プレトリア日本国総領事館の領事だった頃、公然と「南アに求められる公正な社会とは、現行の白人優位をくつがえし、表面上マジョリティとされる黒人支配の国家を建設することではない。」と書き(1985年)、ANCやUDFを「暴力革命を標榜する一部の黒人」と誹謗した東原麻夫が、12月18日付で南アの隣国ジンバブエの大使になりました。なんということでしょう。南ア同様、かつて少数派白人の独裁的支配を「表面上マジョリティ」の黒人が倒したジンバブエ（旧ローデシア）で、いったい彼は何を語り、何をするつもりなのでしょうか。こういう問題ある人物を平気で南部アフリカに戻すのが我が日本の政府である以上、呑気に官民協力のNGOなんて言ってられません。ア・ルッタ・コンティヌーア!

発行　アフリカ行動委員会『あんち・アパルトヘイト・ニュースレター』編集部
〒343埼玉県越谷市上間久里1051－2－716　FAX・0489-78-5280
郵便振替　00100－6－549592（口座名「反アパルトヘイトニュースレター編集部」）
発行　日1995年11月1日定価3百円・年間購読料3千円